

2015 年度 大学院生の活躍

ケニアで本学大学院生が算数の提案授業を行いました！

2016 年 3 月 7 日から 3 月 11 日の日程で、ケニア共和国（以下、ケニアという。）の 6 つの初等教育学校での授業研究へ参加してきました。また、最終日には国際教育コース 梯泰三さん（徳島県現職教員）が Karen C Primary School で 7 年生（日本での中学 1 年生）を対象に算数の提案授業を行いました。

指導単元は分数同士の割り算で、日本でも小学校 6 年生で学習するように、ケニアでも 6 年生の段階で既習済みの内容です。しかしながら、ケニアでは割る数を逆数にし、掛け算を行うといった指導だけで、そこに至るまでの過程説明はありません。単なる機械的なドリル式計算であり、なぜ逆数となるのかといった説明は教科書にも記載はなく、指導する教師の側ですら理解できていない場合があるというのが現状です。実際に、児童以上に指導する教師が計算の過程や概念知識を大切にすると考えたことを持ち合わせていないことも多く、そのため、授業では正しい解答さえ求められれば、計算過程はさほど重要視しない傾向が見られます。今回はそのような背景から、概念の定着、計算式の過程を重視した模擬授業を計画しました。

授業後の感想としては、児童にとっては少し難しい内容であったにもかかわらず、この計算式の概念に気づいた児童も数人いたようでうれしく思いました。現地の先生の中にも概念を理解させる重要性や板書の大切さを指摘した方もいました。ささやかな試みですが、授業を変えていくきっかけになればと願っています。



パズル形式の問題を考えさせる。
いつもとは違った授業展開に戸惑いつつも子どもたちは楽しんでいる様子でした。



板書の説明を行う梯さん。
子どもたちは緊張しつつも目を輝かせて説明を聞いていました。

また、3月10日の午後には、本学自然系コース名誉教授 米澤 義彦先生によるワークショップが CEMASTEА (The Centre for Mathematics, Science and Technology Education in Africa : 教育科学技術省 アフリカ理数科・技術教育センター) にて実施されました。今回のワークショップでは、遺伝子モデルの説明から始まり、最終的にはペーパークラフトによる DNA モデルの工作も実施されました。受講者は、中等教育学校の生物科担当教師でしたが、日本のように幼少の頃から折り紙をしているわけでもなく、手も大きなためか、小さな DNA モデルを組み立てる作業に皆苦労しているようでした。ここで学び取った内容を現場の子どもたちに還元してもらえと思うと非常にうれしい気持ちにもなりました。

最後に、わずか1週間程度の滞在だったにも関わらず、個人的には非常に多くの学びがありました。日本の学校環境は設備や教材に非常に恵まれており、またカリキュラムから指導書、指導法なども充実していることを改めて実感しました。そして、日本式の教授法や考え方をそのままケニアの教育に反映させることができるかといえば、文化、風習、環境面などを考えるとなかなか難しい側面があることも実感し、どのようにアプローチしていくのか考えさせられました。

今回の経験を生かし、残りの学生生活も多くのことを吸収し、学び続けるとともに、将来、教育現場でこの経験を還元できればと考えています。



遺伝子モデルについての講義を一生懸命に聞く先生方。新たな学びに子どもたちが同様、目を輝かせていました。



模型作りに挑戦する先生方。当初の予想に反して、悪戦苦闘する様子伺えます。

文責 三浦 義弘 (大学院 教科・領域教育専攻 国際教育コース L2)